
ヤオイとノーマル

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヤオイとノーマル

【Nコード】

N7675D

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

美人で二物も三物も与えられていながら何と超オタクの良美。そんな彼女に目をつけた信繁は果敢に彼女にアタックするが。オタクでも女の子は可愛いものです。

第一章

ヤオイとノーマル

美人だけれど、こうした評価がつく娘もいる。

これは性格が後で言われることが多いが常にそうとは限らない。趣味が言われる場合も多い。

この娘高村良美もそうであり大きい奇麗な目とまだ幼さが残りながらも整った顔をしているからその点では学校の男達からは人気だ。おまけに色も白くて胸も大きいし脚も奇麗だ。髪は前と横を短くしていて後ろを二つ三つ編みにしてまとめている。美少女と言っている娘だ。

しかも性格まで大人しくて控えめで親切であるときている。顔にルックスに性格と三拍子揃っているのだがそれでも人気がない。人氣がないにはそれなりの根拠があるのである。

「ちよつとあれはなあ」

「そうだよな」

彼等が言い合う根拠は何かというとその趣味だ。彼女は無類のアニメ好き、漫画好き、特撮好き、ドラマ好きなのだ。所謂オタクであると言っている。

「昨日の仮面ライダーね」

「あんたそっちも好きなのね」

クラスメイトの女の子が良美の言葉に思わず呆れる。

「全く。そっちもだなんて」

「仮面ライダーじゃ駄目なの？」

「駄目っていうかね」

そのクラスメイトは呆れた声をまた彼女にやる。

「普通はそこまで手を広げないわよ」

「広げないって」

「あのさ、良美」

また彼女に言う。

「あんたドラマにアニメに漫画につて」

「うん」

「完璧おたくじゃない」

「駄目？それで」

「しかもね」

まだあるのだ。ここからが一番問題である。

「やたら男と男のシチュエーションにこだわるし。それか女か女」

「それがいいんじゃない」

良美はにこりと笑って言葉を返す。彼女にとってはそれが一番なのだ。

「同性同士っていうのが」

「アブノーマルよ」

クラスメイトはむけた顔で彼女に答えた。

「そんなのは。とても」

「そうかしら」

「そうに決まってるでしょ」

言葉が少し刺々しいものになっていた。

「そうじゃなければ何だっていうのよ。同性愛なんて」

「えっ、だって」

それでもわかっていない顔のまま答える良美であった。

「そうじゃないと全然面白くないし」

「面白くないってね。あのね」

良美のその言葉に呆れながらもまた問い返すのであった。

「そういう問題じゃないでしょ。じゃああれ？」

「あれって？」

「仮面ライダーだってそうなの？」

「うん」

はっきりと答えてきた。きよとした顔で。

「男同士の友情とか。そこから発展したのを考えると楽しいじゃない

い」

「不健康よ」

クラスメイトは憮然とした顔で答えた。

「そんなのは」

「不健康かしら。けれど」

まだ彼女は言うのであった。相変わらずわかっていない顔で。

「それがいいから。同性だからこそ」

「何かさあ、それって」

クラスメイトはここで呆れ果てて良美に言うのであった。

「こう言うの？腐女子」

「気にしていないからいいわ」

そうした言葉にも平気な顔であった。

「そんなことはね。私は全然ね」

「じゃあこのまま突き進むのね」

「趣味はそういうものよ」

わかっていてやっているのだ。だから平気なのだ。

そんな彼女である。しかしクラスメイトはまだそんな彼女に対し

てさらに言った。

「いい？」

「今度は何？」

「女の子はね」

「ええ」

「男の子と付き合ってナンボよ」

ナンボときた。少しきつい目になって良美に言うのである。

「経験があつてよ。それがなくて男と男、女と女だなんて」

「男の子と」

「命短し乙女よ恋せよ」

昔から言われている言葉をここで出してみせてきた。他ならぬ良美に対して。

「そういうことよ。あんたも恋をしなさいってことよ」

「私が」

「とにかく相手を見つけないさい」
また言う。

「わかったわね」

「恋って」

それでも良美の顔は変わらない。相変わらずおっとりというかのどかというか全くわかっていないというか。そんな顔をしたままであった。

「私が？」

「そうよ」

クラスメイトは今度は剣呑な顔になっていた。

「相手を見つけてね。いいわね」

「相手って言われても」

「気合入れて探すのよ」

言う方もかなり真剣になっていた。良美に対して。

「わかったわね」

「気合入れるものなの？」

「当たり前でしょ」

言う口から出ている八重歯が牙みたいに見えた。

「そうじゃないととても見つからないものよ」

「ふうん」

「おっとりしている暇はないのよ。だから言うけれど」
またこの言葉を出してきた。

「命短し恋せよ乙女」

「その言葉好きなのね」

「乙女よ恋せよ」

今度は少し言葉が違っていた。

第二章

「これでもいいわよ」

「どっちにしろ恋をしないと駄目なのね」

「あんたもね。実際の恋をしなさい」

言葉が今度はお説教めいてきていた。くどくすらある。

「そうすれば変わるから」

「けれど私は」

「それはそれこれはこれっ」

何かさらに怒っているように見える調子であった。

「テレビの向こうに恋して想像するのもよし。けれど実際の恋もしなさい、いいわね」

「何となくわかったかしら」

「私もこれからデートだしね」

このクラスメイトは実践していた。

「ちょっと楽しんでくるわ」

「頑張ってね」

「だからあんたもなんだって」

また話が良美に戻る。

「自覚しなさい、自覚」

「ええ」

何とも頼りない調子である。しかしそれでも彼女は良美に真剣に話をしている。それははっきりとわかるものであった。クラスの男達はそのやり取りを笑いながら見ていた。

「良美ちゃんもなあ」

「素材は凄くいいんだけどな」

これは彼等もよくわかつている。美少女とはっきり言える顔立ちに大きな胸、かなり天然だが優しい性格。二物も三物も与えられていると行って過言ではない。

「あれさえなければな」

「そうだよな」

「いや、待てよ」

ここでその中の一人が声をあげた。

「あの趣味さえなければだよな」

「ああ、そうだな」

「結局のところはな」

結論はそこであった。はっきり言えば良美が付き合うには敬遠されているのはそのオタク趣味だからだ。問題はそこにしかないのだ。

「けれどあれ何て言うんだ？」

「同性愛にこだわるのか？」

「それだよ、それ」

男達は話をする。

「何て言ったかな、あれ」

「ヤオイだろ」

主に同人誌の世界で使われる言葉である。男同士の恋愛を描いた作品をこう評するのである。同人誌の世界では異常に多かったりする。

「ヤオイっていうのか、あれ」

「良美ちゃんはその中でもかなり重症みたいだな」

始終男同士や女同士のことを言っていれば誰でもそう思うのが自然だ。しかもそれだけではないのが彼女の困ったところなのだ。

「しかもレズじゃねえのか？」

「女同士にも関心が深いからか？」

「ああ」

そうした疑惑も彼女にはないわけではない。

「ひょっとしたら。いやこれは」

「ないんじゃないのか？」

こういう声も根強い。

「彼女は」

「それもそうか。ただな」

「ただ？」

「興味があるのがやばいだろ」

そういう話になるのである。少なくとも彼等から見れば同性愛に傾倒しているというのはかなり問題のある話なのである。

「とどのつまりは」

「だよなあ。本当にあれさえないとな」

「こっちからアタックするのに」

「そうだな」

ここでさつきあれさえないのかと周りに聞いたメンバーがまた出て来た。

「それさえないければな」

「んっ！？小山田」

クラスメイト達はその彼に顔を向けて名前を呼んだ。

「まさか御前」

「ひょっとして」

「前から考えていたんだよ」

赤がかった髪を横に撫でつけてピアスをしている。格好だけ見ればどうにもだらしない格好に見える。だが顔つきは案外真面目そうなのが不思議な感じであった。

「声をかけようってな」

「いいのかよ、彼女で」

「あれだぜ？オタクだぜ」

「しかもヤオイで」

「だからそれだけだろ」

それでも彼はこう仲間達に言葉を返すのであった。

「それさえないければ。完璧だよな」

「まあな」

「あんな可愛い娘ってそうそういないよな」

「趣味を抜けば」

ここが重要であった。

「クラスどころか学校でも」

「最高ランクだよな」

「だからだよ」

彼はニヤリと笑った。だから狙っているのだと言わんばかりである。

「俺はやるぜ。絶対にな」

「絶対にか」

「ああ。まあ見てなって」

そうして名乗りをあげるのであった。

「この小山田信繁、絶対に彼女をゲットしてやるからな」

「まあ頑張りな。けれど相手は手強いぜ」

「手強くて結構」

どうもその程度で怯む信繁ではないようである。それどころか闘志に満ちた顔になってきていた。ニヤリとした笑いはそのままに。

「それだからこそやりがいがあるってものさ」

「そうなのか」

「ああ。そういうことさ」

それを仲間達にも告げる。

「というわけで。今から良美ちゃんに特攻するぜ」

「上手くいくかね」

「さあ」

皆これにはかなり懐疑的な顔になっていた。首を傾げてさえいる。

「何しろ相手があの良美ちゃんだしな」

「難しいよな、やっぱり」

「だからそういうのが面白いんだよ」

しかし彼は変わらない。

「わかったな。それじゃあな」

「まあ頑張れ」

「それしか言えないけれどな」

それが彼への仲間達のエールであつた。余り頼りになるとは思えない類のものであつた。

第三章

「とにかくやってみるさ」

信繁はそれでも彼等のエールに応えて言った。

「吉報を待ってくれよな」

「成功するっていうんだな」

「俺の辞書には失敗の二文字はないんだよ」

「また大きく出たな」

「ナポレオンじゃあるまいし」

不敵に笑って見せてきた信繁に対してまた言う。

「実際に墨で消してやったんだよ」

「御前そりゃ終戦直後の教科書だろ」

「何やってんだよ」

「とにかくだ」

そんな馬鹿な行いも今はどうでもよかった。もう決めていたのだ。

「やってやるぜ。絶対にな」

あらためて決意する。今彼の戦いははじまったのであった。

それは早速その日の放課後にはじまった。静かに下校する良美のところにとさりげなくを装って近付き声をかけたのであった。

「高村さん」

「あっ、小山田君」

向こうも信繁に気付いた。その声はおっとりとしたものであった。

「今から帰り？」

「うん。高村さんもそうだよな」

「ええ」

穏やかな調子でまた信繁に伝えてきた。

「そうだけれど」

「何処か寄るの？」

「ええ。本屋に」

「本屋なんだ」

それを聞いて好都合だと思った。本屋なら誰が行っても何もおかしいところはないからだ。特に学校の制服を着ていれば。制服はこうした時本当に便利であった。

「奇遇だね、俺もだよ」

「小山田君も？」

「うん。ひよっとしたらさ」

ここでは彼は嘘をつくことにした。

「一緒の店かも知れないね」

「そうね」

良美はにこりと笑って信繁のその言葉に頷いた。

「そうだったらいいわね」

「まあひよっとしたらね」

信繁は芝居を続ける。

「このままずっと同じ道かも知れないけれど」

「同じお店だったらそうよね」

良美はそれがどういふことなのか気付いてはいない。どうやら天然はここでも同じであるらしい。これもまた信繁にとっては好都合であった。

「それでもいいかな」

「ええ、別に」

良美の態度はここでも変わらない。

「いいけれど」

「じゃあ一緒にね」

殆どばれてしまっているレベルであるがそれでも良美は気付かない。信繁の下手な芝居が今はかなり上手くいていた。少なくとも目的は果たしている。

「行こうか」

「ええ」

こうして信繁は傍目にはさりげなくとはとても言えないがそれで

もデートに入っただのであった。デート中の話題は殆ど同性愛の話であった。

「それでね。彼と彼を合わせて」

「あれっ!？」

信繁は良美の話を聞いてふと言葉を返した。

「そのキャラって他のキャラとくつついたんじゃ」

「それは別の人の同人誌よ」

「そうだったんだ」

「兄弟っていうのがまたいいのよ」

ヤオイには兄弟という設定は障害にはならないのだ。むしろそういう禁断の関係こそがいいのである。それがヤオイの世界なのだ。

「許されない愛だけれどね」

「同性愛自体がそうなんじゃ」

「それ自体はいいのよ」

「そうなんだ」

これもまた信繁にはわからない世界であった。まるであなたの知らない世界である。

「日本じゃ昔から普通だったし」

「そういえばそうか」

「歴史もののそういった同人誌もあるわよ」

「本当!？」

信繁はそれを聞いて驚かざるを得なかった。

「ほら、織田信長と森蘭丸」

「ああ、あの二人」

織田信長が男色家でもあったのは歴史上有名な話である。他には武田信玄もそうであったし上杉謙信、大内義隆もそうである。平安時代にはそれを日記に書き留めている貴族もいる。当時の日記は後世に読まれることを前提として書かれているからこのことから同性愛というものが日本では普通のものであったことがわかる。これもまた日本の文化なのである。よいか悪いかはまた別の話だ。

「そういうのもあるわよ」

「色々あるんだね」

「あれ、そういうのを探しているんじゃないの？」

「えっ!？」

今の言葉に信繁の顔が固まった。

「だからあの本屋さんに行くんでしょ」

「えっと」

何か話がまずい方向に行っている。それを悟った信繁は一旦大人しくすることにした。そうして良美の話を聞くことにしたのである。

第四章

「あそこは同人誌専門のお店だから」

「ああ、そうだったね」

苦しくとも芝居を彼女に合わせるのであった。

「そういえばそうした本もあったよね」

「小山田君は同性愛興味ないの？」

「ううん、まあそういうのはね」

ここでは本音を述べた。流石にこうしたことで嘘をつけなかった。ついたらついたで後で大変なことになるということを直感で悟っていたからだ。

「悪いけれど」

「それでも色々あるしね」

同人誌の世界も奥が深い。所謂オタクの世界は。

「そういうのもあるしね」

「うん」

（そうだったのか）

信繁はそれを聞いて心の中で思った。

（何かえらいことになりそうだな）

「はい、着いたわよ」

話をしているうちに着いたようであった。

「ここのお店よね」

「う、うん」

何とか芝居を合わせた。苦しいものだが。

「じゃあ入りますよう」

「さて、何を買おうかな」

苦しい芝居を続けながら店の中を見回る。彼にとってはまさに異次元空間であり気が遠くなりそうにもなったが何とか耐えた。それがはじまりであった。

それからほぼ毎日。彼は良美と色々なそういう手の店を回った。常に芝居で合わせているがそれはかなり苦しかった。彼の心理的にもそうであるし芝居自体もかなり酷いものであったがそれでも何とかやっていたのであった。

しかしその疲労は傍目からすぐにわかるものであった。仲間達はそのな彼に対して教室で話していた。同じ教室の端では良美がまたヤオイの話をしている。女の子達から呆れられている。

「御前も頑張るな」

「少なくとも必死だぜ」

信繁は少し憔悴が見られる顔でクラスメイト達に答えた。

「何とかな」

「何とかねえ」

「ついていだけでいい」

「そこまでして付き合うのかよ」

「ああ、そうさ」

今度ははっきりと答えた。

「何だかんだで可愛いし性格だっていいしな」

「まあそうだな」

それは皆が認めることであった。少なくとも良美の性格はいい。しかもかなり。

「それはな」

「だからだよ。趣味にも何とか付き合ってる」

「それもいいけれどよ」

ここでクラスメイトの一人が彼に言ってきた。

「どうしたんだ？」

「ちょっと強引に試してみてもどうだ？」

「強引にかよ」

「ああ、そうだよ」

そう彼に提案するのであった。

「どうだよ。いつもあの娘に付き合ってるんだろ？」

「ああ」

その通りだ。それで振り回されているからこそ今も憔悴しているのだ。それを言われて信繁も考える顔になるのであった。

「それでどうだ？」

「そうだな」

ここでさらに考えを深くさせた。

「悪くないよな」

「だろ？ 時には押すことも肝心だぜ」

「だよな」

あらためてそのクラスメイトの言葉に頷く。

「じゃあ。何かしてみるか」

「具体的にはどうするんだ？」

「そこまでは考えていないけれどな」

今はそこまで考えてはいない。考えてはいるがそれでも今考えだしたばかりである。しかしそれでも少しは考えが出て来た。

「そうだな。まあ大胆にやってみるか」

「大胆にか」

「ああ、ちよつとやってみる」

また答えた。

「やってみる価値があることをな」

「まあやってみな。ただしな」

「ただし？ 今度は何だよ」

「制服でしたらまずいことはするなよ」

「制服か」

ここで自分の制服と遠くにいる良美の制服を見比べる。確かにこれでは悪いことはできない。そうした意味もあるのが制服なのであるが。

「そうだよ。それはわかっておけよ」

「ああ。何か今の言葉で何をするか決めたよ」

疲れた顔に微笑みを浮かべてみせてきた。

「まあ見てな。ヤオイでも何でも」

「何でも？」

「何だよ」

「女の子なんだってことだよな、結局は」

「まあそうだな」

押すことを提案したクラスメイトがその言葉に頷く。

「何だかんだ言ってもな」

「だったらやってやるさ。派手にな」

「頑張りな。吉報を待ってるぜ」

「ああ、是非な」

そんな話をしながらその押しのことを考える信繁であった。彼はその日の学校帰りのデートのようなもので良美に対して声をかけた。今度はゲームショップに向かっていた。

「あのさ」

「何？」

今度は恋愛育成ゲームだ。彼女はゲームも好きなのである。今日はまだ同人誌に比べればまだまともかな、と信繁は思っていた。

「明日だけだよ」

「何かあるの？」

「いつも学校帰りに制服であちこち行ってるじゃない」

「うん」

良美も信繁のその言葉に応えて頷く。

「だからさ。明日は」

「私服でってこと？」

「それじゃあ駄目かな」

何気なくを装ってこう提案してきた。

「趣向を変えてさ」

「そうね。それもいいわよね」

「そうだろう？だからさ」

彼は言うのであった。今度の芝居はかなり上手くいった。自

分でも納得できる演技であり心の中で満足していた。

「それでいいよね」

「うん。わかったわ」

良美は彼の提案ににこりと笑って頷く。その笑みだけを見ていると本当に美少女であった。

「それじゃあそれでね」

「私服はバッグの中に入れていいしね」

「そうね」

二人はもう打ち合わせに入っていた。

「それでバッグも。学校のものの他に」

「そうそう」

話を進める。こうして今度は信繁がリードして話を進める。彼にとっては満足のいく進展で次の日の計画に進むのであった。

第五章

そして次の日。二人は私服に着替えてデートをはじめた。学校の鞆は駅前のコインロッカーに入れて自分の鞆を持っている。

「これでいいのよね」

「そうだよ」

にこりとした笑みを作って良美に応える。彼女は黄色い膝までのスカートにピンクのシャツ、その上に白いガーディアンを羽織っている。信繁は青いジーンズに黒いブラウスとジャケットである。良美が可愛い格好であるのに対して信繁はワイルドな格好であった。

「じゃあ行こうか」

「うん。それで何処に行くの？」

「こっちだよ」

何気なくを装って案内する。そこは普段行く同人誌を置いている本屋やゲームショップとは少し離れた場所であった。やたらと派手な看板で城の様な外見の建物が並んでいる。良美はそうした建物を見て目を少し丸くさせていた。

「何処なの、ここって」

「入ればわかるよ」

信繁はそこが何なのかをあえて彼女に言わなかった。

「入ればね」

「そうなの」

「それで。入る？」

「楽しいところなの？」

彼女は何も知らずに彼に尋ねた。

「ここって」

「うん、楽しいよ」

実は彼もこうした場所に来るのははじめてだ。それで内心不安でもあるのだがそれを隠して彼女に答えている。ここでも演技は上手

くいていた。

「それもありね」

「そうなの」

どうやらこの辺りがどういった場所か本当に知らないようである。

「だったら」

「何処がいいの？」

さりげなく良美に選ばせてきた。

「何処に入るの？」

「私が選んでいいの？」

「うん、どうぞ」

またにこりとした笑みを作って彼女に答える。どうやら男同士や女同士には興味があっても男女のことやこうしたことには全く以って疎いようである。それは信繁にとってはいいことであった。

そのままホテルの中まで連れて行く。ホテルのロビーには目もくれず部屋のパネルの前まで来た。そこで部屋を選ぼうとしていると。

「あっ、この部屋」

横から良美が言ってきた。

「この部屋がいいわ」

「んっ！？ああ、ここ」

彼女のその言葉に応える。見ればその部屋はピンク色の内装で可愛らしいぬいぐるみがソファ―に置かれている。何とも少女趣味の部屋であった。

「ここでいいんだ」

「うん」

穏やかに笑って信繁に答えてきた。

「他にもいい部屋があるけれどやっぱりここが」

「わかったよ。じゃあここだね」

良美の言葉に頷いてその部屋のボタンを押す。すぐに鍵が出て来てそれを手に取る。手に取って後はエレベーターに乗る。それから是一直線だった。

部屋に入るとパネルにあった通りの部屋だった。バスルームがガラスで透けて見えている。ベッドは大きく二人が楽に寝れる。

「さて、と」

信繁は部屋に入るとすぐに部屋の鍵を閉めた。それからまた良美に声をかけた。

「じゃあはじめる？」

「はじめるって？」

「だからさ。いつも良美ちゃんがね」

「ええ」

そつと彼女に声をかける。彼女は少しきよんとした顔で彼に応えた。

「男同士、女同士でしていることを今」

「今？」

「しよう。それだけ」

「それだけって」

まだ彼女はよくわかっていなかった。

「何を」

「まあ俺もさ」

彼は照れ臭く笑ってまた彼女に言う。

「よくわからないけれど。けれど」

「うん」

「痛くしないし。それに優しくするから」

いざとなるとたどたどしくなる。それでも何とか言葉を出すのだつた。

「いいよね」

「何かよくわからないけれど」

信繁の手でべつどに近付けさせられる。その中で彼に応える。

「いいわ」

「それじゃあ。いくよ」

「うん」

良美を静かにベッドに寝かせる。それから始めるのであった。
終わった後で。良美はベッドの上に仰向けに寝ていた。その身体は布団の中に入れ隠している。しかしその中は服一枚着てはいない。
「あのさ」

その彼女に信繁が声をかけてきた。今シャワーを浴びた後で上は裸だ。下にズボンを穿いているだけである。身体はまだ少し濡れていてバスタオルで身体を拭いている。

「痛くなかったよね」

「うん」

良美は少し放心した声で彼に答えた。

「何ともなかったわ」

「痛くなかったらいいよ」

信繁はそれを聞いてまずは安心した。頷いてからソファアに座る。隣にはあのぬいぐるみがある。犬のぬいぐるみであった。

「痛くなかったらね」

「うん。それでね」

「それで？」

「これが男の子と女の子なのね」

「そうだよ。どう？」

「何かまだよくわからないわ」

そう信繁に答えるのだった。

「何が起こったのか」

「わからないんだ」

「ええ。けれど」

良美は言う。

「小山田君ってあったかいのね」

「そうかな」

良美のその言葉には思わず苦笑いを浮かべた。何か照れ臭かった。

「そう言われると恥ずかしいね」

「男同士や女同士も見るのは楽しいけれど」

良美の言葉は続く。

「実際に男の人と一緒にこうするのもいいものなのね」

「よかったんだ」

「小山田君が優しくかったから」

だからいいと言ってみせる。信繁はそれを聞いて何か自分が包まれるような気がした。

「そう言ってもらえると嬉しいよ。じゃあさ」

「ええ」

「これからも。いいかな」

おずおずと彼女に問うた。

「俺、良美ちゃんと一緒にいて」

「それは私が言うつもりだったんだけれど」

「そうだったんだ」

「本当にしたのははじめてだけれど」

それだからこそ強く心に刻まれているのであった。その暖かさまでも。

「これからも。御願いね」

「うん。それじゃあこれからもね」

「ええ。宜しく」

こうして二人の心が重なった。信繁は話を終えるとソファから立ち上がった。そうして良美のところに向かい彼女に声をかけるのであった。

第六章

「またいい？」

「またって？」

「だから。さあ」

何だかんだと言いながらベッドに入るのだった。それから彼女に近付く。

「また。しよう」

「するの」

「うん。駄目かな」

良美の上に来たところでまたおずおずとなってしまう。ここまで来てという感じだった。

「また。したら」

「いいわ」

良美は信繁のその言葉を受けた。

「いいんだ」

「だって。小山田君だから」

そう答えて自分から信繁を抱き締めるのだった。

「暖かいから」

「有り難う。そう言ってくれたら」

「ヤオイもいいけれど」

信繁を抱きながらの言葉であった。

「ノーマルもいいのね」

「俺はノーマルなんだ」

「うん。それでそれは小山田君とだけ」

抱き締めながらにこりと笑ってみせる。

「小山田君だけいてくれればいいわ」

「有り難う」

礼を言いながら良美を抱き締める。そうしてまたはじめるのだっ

た。

それから良美の趣味が変わったかというかと相変わらずであった。やはり同人誌やゲーム、ドラマに熱中し何かといえば男同士女同士だ。それは相変わらずであった。

「けれどいいんだよ」

それでも信繁はこう言うのであった。

「だって良美ちゃんはそれだけじゃないんだし」

「それだけじゃないのか」

「ああ。いい娘だよ」

穏やかで優しい笑みになっていた。

「本当にな」

「何だよ。メロメロになってるんだな」

「彼女をそうさせるんじゃないのかよ」

「最初はそのつもりだったさ」

自分でもそれは認める。

「けれどな。実際に付き合ってみると」

「違うっていうのか」

「全然違うな。何か一緒にいてそれだけで」

「おやおや」

「どうしたんだか」

クラスメイト達はそんな彼の言葉を聞いて肩をすくめる。信繁のそのメロメロぶりに呆れてしまったのである。だが笑顔での呆れであった。

「そこまで入れ込んで」

「オタクはいいのかよ」

「それもいいんだよ」

顔が笑っていた。

「あの娘は何でもいいんだよ」

「そうか。じゃあそのまま行きな」

「行くさ。あの娘と一緒にな」

笑いながらまた言うのであった。信繁は完全に彼女に参っていた。それはホテルに入った時に一層深いものになっていたのである。

「何処にでもな」

「ヤオイもいいのか」

「ノーマルの御前がねえ」

「だからいいんだよ」

彼はまたそれをいいとしたのだった。

「俺はな。もう何処にだって行けるぜ」

「惚れさせるつもりが惚れさせて」

「それで幸せになるんだな」

「なるもんさ。だってよ」

「だってよ？」

また彼等は信繁の言葉に顔を向ける。

「本気で好きになっちまったんだからよ」

「あっ、信繁君」

ここで良美から信繁に声がかかってきた。わざわざ彼のところまでやって来て声をかけてきたのである。笑顔が明るく可愛いものになっている。

「今日だけれど。アニメショップに付き合ってくれる？」

「ああ、いいよ」

にこりと笑って良美に答えた。

「じゃあ今日もね」

「うん、御願い」

首を右に傾げてにこりと微笑む良美であった。

「それで明日は信繁君の言う場所よね」

「その順番だったよね。それじゃあそういうことで」

「宜しく」

そう言い伝えるのであった。二人はお互いの顔を見てにこやかに笑っている。クラスメイト達はそんな二人の顔を見て呆れた笑みでまた言うのである。

「どうやらヤオイとノーマルでも」

「真っ当な恋愛になるんだな」

「みたいだな」

そう話す。しかし今の信繁にも良美にもそれは耳には入らなかった。ただ二人だけの世界でにこやかに話をしているだけであつた。心地よい世界の中で。

ヤオイとノーマル 完

2008・1・25

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7675d/>

ヤオイとノーマル

2010年10月8日15時34分発行